

湖中における小型斃死コイの減耗に関する実験

井戸本 純一

◆背景・目的

天然水域において回収されたKHV斃死コイに小型の個体が少ない原因として、発見されるまえに他の動物によって捕食される確率が小型のものほど高い可能性が考えられる。そこで、琵琶湖沿岸の水中における小型死亡コイに蟻集する捕食生物の実態を把握するため、水中ビデオカメラを用いた連続観察を試みた。

◆成果の内容・特徴

- 氷冷後失血死させた小型のコイを水中ビデオカメラの前に固定して水深4mの湖底（水試港湾内）に沈め、夜間は赤外線照明を施して連続観察した。
- スジエビが昼夜を問わず蟻集し、盛んに摂餌行動を示したが、魚体の減耗にはほとんど寄与しなかった。
- ヨシノボリ、オオクチバス、ブルーギル、ヒメタニシなどが来遊したが、魚体には興味を示さなかった。
- 延べ5日間（2004年8月下旬に実施）の実験中、カワウがほぼ毎日来遊し、体長9.4～17.0cmの4魚体中、大きな2魚体を奪取した。

◆成果の活用・留意点

- 沿岸域に遍在する水生動物による斃死コイの減耗は小さいと考えられる。
- カワウの捕食限界を超えると考えられる体長30～50cm程度の魚体についても実験する必要がある。
- 浮上あるいは陸地に漂着した状態の魚体についても検討する必要がある。



図1 実験装置，観察は1分ごとに2秒間録画するインターバル撮影によった。



図2 体長14.5cmの魚体を食いちぎったカワウ。残った頭部も翌日奪われた。